に黒い腹掛けをかけて倉庫へ仕舞う習慣となっていましたので、この日も事務終了後でしたから全部、帳簿は倉庫へ始末してありましたから、豪壮なる元のミカド・ホテルの三階建の鈴木商店の事務所は一瞬にして灰燼に帰しましたが、営業用の帳簿は安全であったが為に直ちに商売には支障なくはじめられるということは不幸中の幸いでありました。この焼打ち騒動の為には姫路から軍隊も出動するという始末でして、えらいことでした。元町などの店頭のガラスなどは、野球のバットや棒切れなどでメチャメチャに破って歩くという暴動さでありました。それで暴徒は何時また焼残りの本店の倉庫等を襲って来るかも判らんというので、この後の数日間は、万一に備える為、マッチ部の西岡勢七君の心易い町の顔役を数人頼んで、之に警察の許しを得てドス（日本刀）を公然と、めいめいに差させて倉庫の附近を警戒させていたのには、西岡君はじめ顔役達が暴徒が来たら何時でも切捨てご免だと、其の内心の得意や思うべしでありました。鈴木のお家さんはじめご主人達、金子さん、柳田さん、西川さん達は、然るべく難を避けられて居られていました様でした。

元来、鈴木商店は日本の商業繁栄の為に欧州へ精米の輸出をもし、また国民のために政府の依頼を受けて安い外米を輸入して米価の上昇を調節していましたが、この事も当時の世間のある部分の誤解と反感から、遂にあの様な騒動が起ることとなりまして、誠に世の誤解というものは恐しいものです。之に対しては鈴木商店の名に依って、永井さんの執筆になる鈴木商店の米の商売に関する理路整然たる名文の弁明書を発表され、世間の誤解をとかれたことでした。静かに五十年の昔を追想して只だ感慨無量なるものがあります。

雑詠三句　橋本隆正

ついそこに天在り地在り静かな炉
これほど全（また）き身に復す朧月
孔子ぐるみいつしか山鳩になり

東川崎町から海岸通り十番地へ

木畑龍治郎

「鈴の木」の若木は、見る見る根を張り枝を伸ばして梢は天を摩すばかりとなった。「三ツ木」や「菱の木」を睥睨して天下に覇を称えんとした。しかし喬木に風は強い。或る日はげしい嵐は迅雷を巻き起して「鈴の巨木」に襲いかかった。巨木はあえなくも地響を立てて倒潰した。そして悲風愁霜幾春秋。親株の根から芽を出した側木や孫木は、今や親木をしのぐ高さとなった。幾百本もの森のコンチェルンは、今はもう朽ちて面影のない「鈴の木」の根株をじっと見守りつつ、幻の親木の立姿を仰いで居る。何時迄も何時迄も。

（1967・3月、鈴木商店解散四十周年を聴いて。長谷川幸延）

（一）

大正七年三月の或る日、私は「神戸市東川崎町一丁目一番地」合名会社鈴木商店」の部厚い封書を受取った。私の採用通知と一連の関係書類である。その封筒の裏に印刷された三十余の電話番号と電信略号「カウベ・カネタツ」とあるのが、私が初めて知った本店の商号であった。大仰に言えば私の半生の運命を決定づけた一瞬であったかも知れない。大いなる未知への希望と不安を抱いて、同じ採用の三十人余りと見習員として宇治川の本店に勤務する事になった。初めての朝、北野の済美寮から引率されて本店の表玄関に立った時、私は思わずその偉容にたじろいだ。のしかかる様な重圧感にかすかな血のふるえを感じた。中世期風な洋館建に和式を加味した寄せ棟破風造り三層の建物は、前年迄「ミカドホテル」として令名を高めて来たのだけに、外観は更なり、内部の設備調度等目を見張るばかりだった。四十に余る各事業部は個室に割拠して一業一派を形成し、さながら群雄覇を競うが如き壮観を呈して、将に鈴木天国の名に恥じぬ秩序と風格を誇示して居た。此処から若い鈴木商店の青春と情熱が沸騰して雲を呼び、風を起して行くのである。

大正七年は歴史的にも重大な年であった。五年越しの欧州大戦も十一月には終結し、さしもの独乙も遂にコンビエニーユの森に万哭の怨を呑む事になるのだが、米騒動の勃発したのも此の年の事である。脇道にそれるが一寸、大正初期の国状に想をめぐらせて見度い。

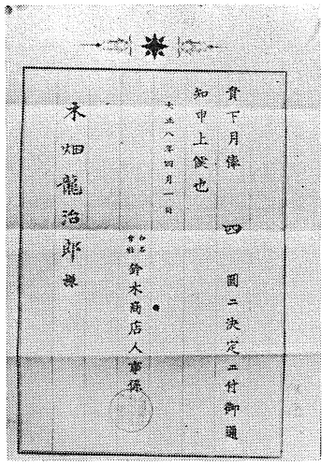
（二）

天地（あめつち）のむた窮みなき
　天津日嗣の御位に
我が大君の登ります
　今日の御典（みのり）の賢さよ

明治生れの私等が初めて際会する世紀の大典大正天皇御即位式の奉祝歌である。永い間の諒闇から明けた大正三年の秋は国を揚げて奉祝の波に湧き返った。久しく沈滞した国民のエネルギーは爆発的な興奮を巻き起して新生日本は天地に躍動した。そんな折はしなくもバルカン半島の一角に暴発した銃声は瞬時にして欧州を硝煙の巷と化し、全世界平和の夢を震撼した。我が日本も日英同盟のよしみから連合国側に名を連ね、参戦する事となる。宣戦の大詔が渙発されるや、陸軍中将神尾光臣は総督ワルデック大佐の死守する膠洲湾青島要塞を一気に席巻し、制海権を奪取して戦捷を恣にした。これと呼応して、我が財界、産業界も鳳翼を羽ばたかせ、荒廃した欧州は絶好の消費市場として急速に我が国力に進展を齎した。世に言う第一次大戦景気である。この時代に於ける鈴木商店の躍進については敢えて賛言の要はない。話を本筋に戻す事にする。

（三）

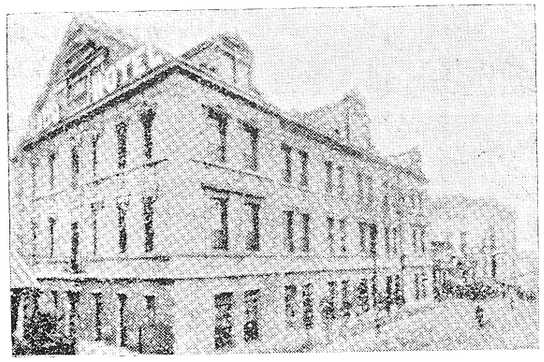
私の手許に今なつかしい物を数種保存して居る。その中の一つ「貴下月俸四円ニ決定ニ付キ御通知申上候也。合名会社鈴木商店人事係」。月給の辞令である。厚手の洋紙に小豆色で線を書し、氏名と必要な箇所に実に立派な肉筆で書き込まれて居る。その月給が一年たたぬ内に五円となり、二割の戦時手当（店員以上は五割）が付き、賞与は年四回支給されたのだから、坊さん風情の我々にも笑いの止まらぬ待遇であった。その内、思いも掛けぬ八月には例の本店焼打ち事件が勃発、あまつさえ世上の批判に晒される様な悲運に直面した。「鈴木商店炎上」再びあの端麗な建家に相見える事はなくなった。僅に玄関脇の大金庫のみが厳然として猛火に耐え残り、他の殆んどが為有に帰した。けれどもこうした一連の出来事は却て我々全鈴木（オール）の憤激と斗志をかき立てる結果となり、総蹶起の気概は天に冲するものがあった。直ちに焼跡は整地されて昼夜兼行十二日間の超スピードで、スレート葺平家建ながら本店営業所が竣工、神戸市民をアッと言わせた。工事部吉本亀三郎博士、土屋新兵衛さんの見事な離れ業である。バラック建の急造とは言っても表東寄せの見付けには「ヨネマーク」を浮き彫りに押出し総モルタル仕上げ。棟は「合掌組合せ」解放式の広々としたもので立派に体裁は調って居る。後年、本店が移転した後も長く神戸郵便局が使用、昭和終戦の前迄存続して、私等辰巳会員の郷愁をそそったものである。とは言うものの三層の甍を仰いで出退した昨日に位べ、今は中央廊下を挾んで左右の大広間にしばらく雑居の不自由をしのばねばならん事になった。それに従って思い出されるのは愉快な食堂風景である。勿論スペースを縮少されて居るので苦肉の策として立食式になった。大変能率的で簡潔なのが歓迎されて却って効果はよかった様であった。偶々、米価の高騰と品不足の為、今で云う代用食として週二回お昼にうどん食を支給されたが何杯でも喰べ放題と言うのが若い間に人気が出て、大食競べのレコードが出る等、朗かな話題が渦巻いた。その頃、食堂の板壁に大きな張り紙が出された。某日、神戸岩屋の浜で実業団のボートレースが開催されるので、我が鈴木商店も之に参加、オール本店の支援を希うと言うのである。曰く「檄!!!摩耶山麓風運転た急にして、敏馬海上、殺気天に漲る、満を持して機到るを俟つ我が辰の健児は……云々」大層な書き出しで度肝を抜かれたが、一代の名文として今でも印象に残る。舵手、整調、二番、と選手の名も列記されてあったが、誠義さんの御子息日野俊夫さん、大坪さん、鹿田さんの名のあったのを憶えて居る。当日は船舶部の腰押しでランチ、サンパン総出の応援を繰り出し


貴下月俸　四　圓ニ決定ニ付御通
知申上候也
大正八年四月一日
合名
会社　鈴木商店人事係
木畑龍治郎殿

大正八年の月給の辞令

たが、結果は何うやら簡単であったらしい。大正八年には扇港開港五十年祭が催され、全市を揚げての祝典となり、幾多の催物が展開された。神戸市背の神戸山、錨山には紋章にイルミネーションが飾られ、市民の目を楽しませたが、平家乍ら我が鈴木商店の建物にも棟、軒先、そして玄関正面の「ヨネマーク」にも燦然と電飾を施し、東川崎町の夜空に一きわ華やかに輝いた。

明けて九年三月、今の陛下が摂政の宮殿下として初の英国御訪問に神戸港から鹿島立ちせられる事となり、御西下になった事があった。御召艦「香取」に御座乗の為、駅からメリケン波止場に到る御道筋は市民の奉送の場となった。腕車を連ねて我が鈴木商店前を御通過になる、若き日のプリンスを全店こぞって御見送り申上げた事もあった。



◀ミカドホテルのスペルもそのままの頃の本社（荒尾親成氏提供）

(四)

そして五月、思わざりき歴史の一齣に天雲が立ちはだかり光をさえぎった。巨星は長い光芒を引いて永遠の宇宙へ音もなく消え去って行った。率如として西川文蔵さんが逝かれたのである。メーンシャフトの歯車が一枚欠けて無気味なきしみ音を立てて空転した。云い様のない沈鬱と空白が流れる。四十七才と言う若さで終えられた痛恨には言葉もない。私等は今徒に馬齢を加えて、あの頃の西川さんよりは遙かに年老いたにも拘らず、今も私等の胸に残る西川さんは依然として十才も二十才も年上の、そして一廻りも二廻りも大きな面影でしかない。霊柩を送る自動車の列が長々と会下山に向ったあの状景を今も忘れる事が出来ない。

話が一寸横道へそれるが、朝日新聞の全国中等学校野球大会が米騒動の為、第三回大会が中止になった。確か第一回の優勝は愛知一中、第二回が関西学院中学部と記憶する。地元関学は内海、沢と続く名投手を擁しての黄金時代であったが、第四回も亦地元神戸一中が覇権を握った。その大会に先立つ事半年程前の話。日商社長の今の西川さんが若い学生姿で、よく中山手の亜米三倶楽部へ庭球をしに来られた。私も度々一緒に遊んで親しくして頂いた。その頃、西川さんと一緒に神戸一中の制服姿でテニスをしに来た山口君と云う少年があって、私等も直ぐ仲間なじみになった。腕前の方は大した事はなく、西川さんと組んで前衛をやって居たが、やたらにオーバーラインして滅法腕が強いのが目立った。無口でおとなしかったが、色あく迄黒く、面長の顔に太い鉄ぶちの眼鏡をかけて、長身豪快な風ぼうをして居た。八月になって初めて判ったのだが、その人が第四回優勝の神戸一中の主戦投手であった。鳴尾球場から凱旋の日、私は西川さん等と一緒に元町一丁目の丸善運動具店に帰還する、その英姿を見んものと出迎えたが、その時は既に私等の手のとどかぬヒーローになって居た。西川さんにまつわるエピソードである。

(五)

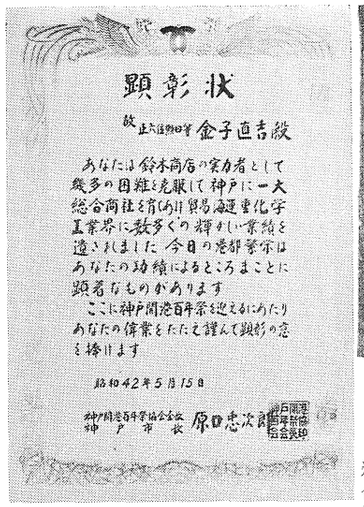
さて、明暗交々を縄いまぜて東川崎町の仮建築から脱皮する日が来た。大正十年の初め、海岸通り十番に白亜の洋館鈴木商店本店が竣工した。コンクリート造、一部石造総白テラコッタ張り三階建。玄関正面ホールには、その頃まだ数少いエレベーターが備えられた。大小数十の室に区切られて、各部各業種が整然と隊伍を調えた。戦後の好況は稍下降しつつあったものの、まだまだ貿易界の鼻息は荒く、SZKは依然、七つの海をリードして、その地歩をかためつつあった。想うに東川崎町時代の五年余りが絢爛たる開花期とするならば、海岸通りの五年間は結実期に当たらねばならない筈だが、現実はあまりにも厳しい幾多の試練を包蔵して居た。そして遂に狂瀾を既倒に帰す由もなく、あたら十年は興亡の夢と柯した。私は店の運命に想を走せる度に、いつも野臭粉々たる織田信長を連想する。上杉、武田を背後に牽制しつつ、京を望んで野望潰えた梟雄信長の無念さに、いつも共感を憶えるのである。私は今、おぼろな記憶をたどって、この十年本店の主流をなした人々を追想、名前を書き出して見た。綺羅星の如き各部の主任である出先関係の方々はしばらくおく。西川文蔵、森衆郎の両支配人を擁して比類ない推進力を発揮した往時を回想して頂き度い。

会計部　日野　誠義
外電部　芳川筍之助
保険部　横山　正躬
輸出部　永井幸太郎
雑穀部　沢村　亮一
米肥部　永井幸太郎
船舶部　荒木　忠雄
製油部　妹尾　清助
曹達部　磯部　房信
造船部　辻　湊
塩業部　松原　清三
麦粉部　篠原　正次
砂糖部　水野　克巳
雑貨部　松本　褒一
東洋輸出部　大久保弥十郎
樟脳部　楠瀬　正一
機械部　須田沢次郎
燐寸部　西岡　勢七
直輸部　佐竹　員治
倉庫部　宇野　一夫
露西亜部　松永祐三
文書部　椋野　武吉
人事部　西村　正雄
庶務部　桑田卯三郎
庶務部　加藤廉之助
庶務部　土居　英成
教育部　高橋　行次
土地部　豊永（敬称略順序不同）

(六)

眼を転ずれば極東の探題軍国日本は一等国の名に酔い驕り、頽廃的な思想は漸く世相に滲透しつつあった。そんな時、国民の惰眠を醒ます様な大正十二年の関東大震災勃発、軍縮のもたらす不況、そして遂には大正十五年、天皇陛下御不例崩御と矢継早やな悲運を胚胎して国運は一路、昭和初期の経済恐慌期へと暴走して行った。この時代の鈴木商店の事は多くは語れない。私は十三年度徴集軍縮の甲種として、その頃第四師団の兵籍にあった。十五年十二月に除隊、その月の二十五日は「昭和」と改元、昭和元年は僅か六日間で年が改った。残念乍ら昭和二年四月前後の本店の模様は詳でない。幾許か経て、私は本店在勤中の上司横山さんを海岸ビルにお尋ねした事があった。ビルは既に名も改まり、当時の家の子残党が僅かばかり踏み止って居るに過ぎなかった。私は云い様のない空しさを抱いて懐しの母屋を振り返り振り返り退去した。

星移り人は変わる。国破れて今や東川崎町にも、海岸通りにもありし昔の鈴木商店を偲ぶよすがもない。多くの偉材が影を消して行かれた。そんな中で私の親方、横山正躬さんは、芳川筍之助さんと並んで、我が辰巳会の最高峯に在わす。来年は米寿と承る。目出度くも又貴重な限りである。その横山さんに手塩にかけて頂いた子飼いも、今は富山の村井順三と私の二人だけになった。最も信頼の厚かった小串牛蔵、江本昇一両兄の早世は、横山さんにとっても最大の恨事であろう。叶野健治、加藤輝威、具島邦彦、広岡一男、吉田菊次郎の諸氏が横山さんの膝下に参じ、そして転出して行った。想えば遠い昔の夢でしかなかった事が半世紀後の今日語り草として日の目を見る事の出来る様になったのは大いなる辰巳会の余慶と云うべきであろうこの夢は今や続篇を展開しつつある。錦上更に華を添て何時迄も果しなからん事を希いつつ稿を閉じる。



顕彰状

故正六位勲四等　金子直吉殿

あなたは鈴木商店の実力者として幾多の困難を克服して神戸に一大総合商社を育てあげ貿易海運重化学工業界に数多くの輝かしい業績を遺されました今日の港都繁栄はあなたの功績によるところまことに顕著なものがあります

ここに神戸開港百年祭を迎えるにあたりあなたの偉業をたたえ謹んで顕彰の意を捧げます

昭和42年5月15日

神戸開港百年祭協賛会会長
神戸市長　原口忠次郎

金子直吉氏、神戸開港100年祭に表彰さる

去る5月15日神戸開港百年祭に当り神戸市長より故金子直吉氏に左の顕彰状並に銀牌を贈られました

顕彰状

故正六位勲四等　金子直吉殿

あなたは鈴木商店の実力者として幾多の困難を克服して神戸に一大総合商社を育てあげ貿易海運重化学工業界に数多くの輝かしい業績を遺されました今日の港都繁栄はあなたの功績によるところまことに顕著なものがあります

ここに神戸開港百年祭を迎えるにあたりあなたの偉業をたたえ謹んで顕彰の意を捧げます

昭和42年5月15日

神戸開港百年祭協賛会会長
神戸市長　原口忠次郎